

第17期
「京都教師塾」

令和5年2月11日

塾生通信

学びの広場

February

京都教師塾通信

No.8

京都市教育委員会 教員養成支援室

小学校における授業づくりと学級経営 講師 松藤 浄乃 指導主事



～塾生のレポート集より～

今回の講義を通して学んだことは二つある。一つ目は、仕事の志や使命感をもつことである。学校実地研修で1年生の図画工作科の授業を見たときに、先生が授業後にとても悩んでおられた。今日の授業がうまくいかなかったとおっしゃっていて、次に向けての課題を考えておられた。その時に、カリキュラムがあるから図画工作科をするのではなく、子どもたちが楽しく活動でき、身につけてほしい思考や感性といったねらいに向けて授業をされている姿があった。私は、その先生の姿を見て心を動かされた。学級に合わせた授業を行い、子どもたちの未来をより良いものにするという使命感をもって学級を経営していくことの大切さを学んだ。二つ目は、時代に合った学習をすることである。私が経験してきた授業を行うのではない、現在の社会に合った内容を教えられるようになりたい。そのためにも、自分自身が学び続ける姿勢でいることが求められる。今はまだ私自身も深く教育現場を知ることができていないため、教師になったら子どもたちと共に学んでいきたい。また、教師になる前の今から京都市の教育を研究したり、自分の中にストックを増やしたりしていきたい。

講義の中で、先生が実際に担任された学級の子どもたちについてふれられていたが、あんなにも様々な個性の子どもたちが一つの学級に集まることに少しだけ不安を抱いてしまった。私が小学生の時とは違い、多様な悩みを抱えている子どもたちがいる。そのような子どもたちの悩みにいち早く気づき、適切な手立てを考えられる教師を目指していきたい。どこでつまづいているのか、何が得意なのかといった個々の特性を見抜き、個別の支援を心掛けることが大切だと感じた。さらに、地域によっても子どもたちの姿は異なるため、その地域に合った指導法も考えられる対応力を身につけたい。情報をアップデートしながら日々学び続け、子どもたちのことを一番に考えて行動していきたいと改めて実感した。

～レポート担当スタッフのコメントより～

実地研修先の先生の授業への姿勢、素晴らしいですね。そして、気づいたことによって、今日の講義と関連付けることができ、よい学びができたと思います。先生の授業を見せていただく中で子どもたちの実際の様子も見て、いろいろ考えることができたように感じます。松藤先生は英語の授業実践も踏まえて、話をしてくださいました。自分たちが習っていた頃の授業とは、ずいぶん変わってきていることも実感できましたね。松藤先生は、“一人一人がかけがえのない未来の担い手”と、おっしゃっていました。目の前にいる子ども達に、未来に通用する力を、「今」つけていきたいです。様々な子どもが、クラスにはいます。それぞれの子どもに、学校体制でしっかりと目を向けるようになっていきます。まず、担任の先生が気づき、受け止めることがスタートです。

信頼される教師になるために
～中学校での実践から～
講師 東谷 祐子 主任指導主事



私は、今回の講座を受けて、改めて教員という仕事には臨機応変さや柔軟さが大切だと実感した。喫煙していた生徒への対応についての話で、「必要なタイミングを逃さず、その時に必要なことを伝えられるからこそ、生徒に通じる」ということをお話しされて、伝えるタイミングが伝わり方を左右するという重要性に気づいた。また、「褒める」という行動について、私自信は褒めて生徒の力を伸ばしたいと考えており、肯定的に捉えてばかりいたが、生徒の中には、「褒められたいから良いところを見せよう」といった考えを抱いてしまう生徒が出てくる可能性があって、承認欲求を満たすためだけの指導になってはいけないということも、東谷先生のお話から気づかされた。生徒にその時どんな指導をしたら、一番よい学びになるのかを瞬時に判断して選択できるというのは、とてもハードルが高いことのように感じ、正直、自分にそんな力がつくだろうかと不安になった。しかし、教員になるまでにまだ時間はあるし、その中でボランティアに行ったり、教師塾の他のメンバーと意見交流をして引き出しを増やしたりする努力はできると思う。もちろん、教員になってからも、常に学び続けていかなければならないが、自分の中で「私はこういう教師でありたい」といった軸をもっておくことも、その上ではとても重要だと思う。グループで意見交流をしているとき、皆が「色々な先生の話聞いてると、どれも大事だと思って全部がんばろうとしてしまう」と話していた。私も本当にそう思っていて、自分の教育観が揺らいで、自信をなくしてしまうことがある。これからは、周りの人の意見を参考にす態度もしっかり尊重しつつ、自分が教員になったら「自分自身は」どう在りたいか、という信念をしっかり貫いていきたいと思う。そのために今は多くの経験を積極的に積んで、自分の糧にしていきたい。

喫煙指導の際、経験の少なさから戸惑いを感じていた当時の東谷先生は、同席していた副担任の「喫煙していた時に、何を考えていた？」という問いかけや、「君にはもっとこんなふうになってほしい」という思いを伝えられる姿から、「本質」にせまる指導の在り方を学ばれました。そして、「本質」を見抜いて指導できる先生、ちゃんと叱るとはどういうことかについてふれられ、信頼される先生の姿を具現化してくださいましたね。また、不正な投票場面での瞬時の判断、生徒への対応の中に、東谷先生の「信念」や「軸」があることが感じられたと思います。同時に、謙虚に学ぶ姿にこそ、経験の積み重ねはあると思います。

1/21(土)午前
小学校

第7回教育学講座 全体会の様子

1/21(土)午後
中学校



第6回特別講座

「GIGA 端末を活用した授業実践」

講師：総合教育センター 前田 穰 主任指導主事

第6回は総合教育センターの前田穰先生に「GIGA 端末を活用した授業実践」についてご講義いただきました。現在、児童生徒一人一人にタブレット端末が配備されるなど、「GIGA (Global and Innovation Gateway for ALL) スクール構想」の下、学校における ICT 環境の整備が進められています。そのような中で、授業はどのように変わのでしょうか。そのキーワードとして、講座の中で、「個別最適な学び」と「協働的な学び」の実現が挙げられています。

まず、「個別最適な学び」について、GIGA 端末の導入によって、従来は指導者が児童に合った資料を用意していたスタイルから、児童生徒ひとりひとりが自分に合った資料を選択するスタイルへと、学びがより個別最適なものへと発展させることができると述べられました。ここでは、体育科の「マット運動」が例として挙げられ、技に挑戦する自分の姿を GIGA 端末で繰り返し撮影し、その映像を鑑賞することで自身の課題点を見出すとともに、自らの技能の変容をとらえること（自己変容の確認）ができると解説されました。また、GIGA 端末を活用すれば、挑戦する技に応じて、モデルを示した動画を資料として参照することができるなど、個別の学数課題に応じた資料の検索や閲覧をより効率的に行うことができることも教えていただきました。

次に、「協働的な学び」について、GIGA 端末の活用によって、教室内の児童生徒同士がより速く効率的に自らの思いや考えといった情報をやりとりできるだけでなく、異学年や他校の児童、地域の人々、専門家といった様々な人々とのやりとりが可能になることで、学びの形がより協働的になることが示されました。

京都市立学校では、GIGA 端末を活用した新しい教育実践が次々と開発（講義の時点では約500例）され、それらは実践事例として、クラウド上やポータルサイト上でデータ共有されるなど、より主体的・対話的で深い学びを実現するための取組が協働的に推進されています。今後も、児童生徒に育みたい力に応じた学びの形を模索していきましょう。



1/21 小学校

第7回教育学講座 分散会の様子

1/21 中学校



※1月24日（火）の補講は、大雪のため中止しました。

子どもたちの今と未来のため、社会のあらゆる場で
学びの対話の基盤を築き実践しよう!

